

「白壁フォーラム 大腸疾患の診断」

白壁フォーラム編集委員会 編

国立がんセンター中央病院・放射線診断部

牛 尾 恭 輔

本書は、白壁先生の弟子にあたる多くの先生方が、その献辞に“白壁彦夫先生への尽きせぬ感謝を込めて”とのみ書いたように、白壁先生の指導を求めてはせ参じた多くの先生の思慕が成し遂げたものである。しかしただそれだけではない。そこには感情を昇華し、白壁先生が真に求められた学問、特に比較診断学、比較形態学に基づいた理論の統一化を、多くの炎症性疾患、腫瘍性疾患を通して読者の眼と心に訴えている。その意味において、白壁診断学とも言うべき消化管の形態学の真髄を述べたものである。本書を読めばこの白壁フォーラムの歴史が、X線二重造影法による診断学の歴史であるとともに、戦後の荒廃から見事に立ち直り、医学の中で世界をリードするようになった、わが国の形態診断学の歴史でもあることがよく理解できよう。

西沢護先生、中村恭一先生をはじめとする編集委員会のメンバーは、北海道から九州にわたる多くの病院・施設から、それこそ貴重な症例を集め、炎症性疾患、腫瘍性疾患の診断理論を示している。その中には白壁理論に立脚した、またその理論を生み出した多くの代表的な症例がおさめられている。しかし、ただX線像や内視鏡が美しく、切除標本や病理組織像と所見の1対1の対応がなされた典型的な症例を示しただけではない。この本は実際の臨床の場で、患者を前にして、シャークアステンやプロジェクターを前にして、どのように所見を読むか、どのように診断したらよいか、がわからないとき、また学問の方向性に迷い

が生じたとき、燈台の灯が船を導くようにわれわれを導いてくれる本でもあり、発想の転換を導く名著である。

まず炎症性病変では、白壁理論をなす“点・線・面の要素”、“病型と病期”の考え方が詳しく示され、その理論を裏付ける24例の症例が、美しいX線像とともに目に迫ってくる。更にその経時的な変化が病理像とともに続々と示されているので、圧巻である。次に、腫瘍性病変では大腸癌に力が注がれている。25例の比較的小さくて背の低い病変、IIc型の病変について、美しいX線像、内視鏡像が提示されている。また、なかには病変をどのように描出すればよかったのかという反省の弁が率直に述べられてもいる。そこからは常に前へ前へと進んで行かれた白壁先生の姿が見えてくる。そして先生の診断学を受け継ごうとする覚悟が、記述の随所にみられる。また、画像の細かな分析に立脚した組織発生、部位、肉眼型、年齢、大きさ、深達度などのデータのもと、大腸癌の発生と、その発育・進展の追究に力が注がれている。そして、現在注目されているde novo癌や腺腫由来癌における組織発生と発育進展の生物学的な差が詳細に記述されている。当然のことながら、内視鏡やX線検査による微小癌発見のコツ、微小病変を見つけたときの処置の仕方、微小癌の病理組織診断が述べられているのでわかりやすい。

ところで本書で特筆すべきことは、症例の最後には必ず「症例から学ぶ」という項があり、その多くに白壁先生のコメント、発言が記され

ていることである。おそらく白壁先生自身は、何気なく、先生のこれまでの知識、血を吐くようなご苦労から得られた直観の言葉を、短いコメント、ときにはつぶやきとして発言されたに違いない。その言葉には、これまでの先生の学問の軌跡が込められている。読者の方々は、いつも学問の真髄を求めて道を究めようとする先生の姿と発言が、いかに皆を引きつけたかがわかるであろう。私も一時期、白壁フォーラムに出席させていただいたことがある。白壁先生の発言とコメントからは、しばしば直観から出た新しい用語が生まれてきた。最初は私もその深い意味を理解できず、疑ったこともあった。しかし、時間、年月の経過とともに、その意味するところが、ちょうど、海岸に波がヒタヒタと押し寄せるように次第にわかってきたものである。その中から外国の形態診断学との違い、患者、症例、病変から学ぶことの大切さを教わった。そして病変を示す画像や標本をいかに大切に扱うかを学んだ。更に実際の症例や、その画像を前にして、深い沈黙の後に発せられる白壁先生の含蓄に富む、またときには怒りと熱情あふれる言葉を、心臓の鼓動を感じながら耳を澄まして待ったことを思い出す。このような真剣勝負の雰囲気と白壁診断学、白壁理論が、余すところなくこの書籍に詰まっている。他に類を見ない立派な名著を刊行された先生方に、深く感謝する。

● A4 頁306 図15 写真265
原色図372 表74 1996 定価
18,540円(税込) 円520

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)